

できる人の

「書きかた」「話しかた」

伝えたいことを確実に伝える表現力



吉野秀

著者略歴

吉野 秀 (よしの すぐる)

1963年生まれ。中央大学経済学部卒業。日経ホーム出版社で各誌の編集を務め、「日経アドレ」では編集長として誌をまとめる。その後金融、流通、転職、就職、企業経営、IRなど、多ジャンル編集長を歴任。現在は経営コンサルティング、研修・セミナー講師、執筆などの活動を行っている。著書『言い訳の天才』(すばる舎)が話題になり、06年1月～3月末までフジテレビ「笑っていいとも!」木曜日・「1丁8丁手8丁・いいわけ番長」コーナーに解説者でレギュラー出演。近著に『無敵のケンカ交渉術』(すばる舎)、『「言い訳」がよい訳』(桃園書房)などがある。ブログは<http://yaplog.jp/iwake/0218>
「渋谷ビジネスリーダー塾」(<http://www.shibuya-business-leaders.com/>) 主宰

ソフトバンク新書 039

できる人の「書きかた」「話しかた」 伝えたいことを確実に伝える技術

2007年4月25日 初版第1刷発行

著 者：吉野 秀 (よしの すぐる)

発行者：新田光敏

発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13

営 業：03-5549-1201

装 幀：松 昭教

組 版：クニメディア株式会社

印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社第2書籍編集部まで必ず書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

©Yoshino Suguru 2007 Printed in Japan

ISBN 978-4-7973-4117-1

できる人の「書きた」「話」
いことを確実に見え表現力

江苏工业学院图书馆 藏 章

かた

吉野
秀

ソフトバンク新書
039

まえがき

自主セミナー『読む・書く・話す』チカラのブレイク・クラブ』を始めて、約1年になろうとしている。その間の延べ生徒数は60人。都心の喫茶店や私の自宅近くのファミリー・レストランで喧々諤々、表現力のレクチャー・議論を重ねてきた。このクラブを発足した経緯は単純明快で、日常生活の中でちよつとした言葉・表現で関係がこじれたり、不仲やいさかいが起きている悪しき現実を解消したいとの願いだった。相手を格下に軽く扱ったり（年長面）、自分の方が優秀だと馬鹿にしたり（権威思考）、自分を最優先する（利己主義）、絶対に自分が正しい（固定観念）……。

これらは無意識のうちに表現として露出してしまうもの。もつと、相手の気持ちを慮り、理解・納得・合意してもらええる表現力を身につけよう。この強い思いで集まっている。

書く習慣が薄れてきた昨今、それに合わせて話す能力も落ちてきたと言われている。

伝えたいことが整理体系化されたからこそ、きちんと書けるのであり、きちんと話せるパスポートを手にしたと言えるだろう。もう一度原点へ立ち返って、表現力のポイントを1つ1つ丁寧に押さえる。そして、それを実行することで自分に大きな自信を持つ。これがコミュニケーションにおける創造的なシナリオだと考えている。

一流と二流の違いはどこに現れるのだろうか。いで立ちや表情、品格、動作などいろいろなところで如実に出るが、中でも「書く」「話す」の表現力へ大きく投影されると思う。相手を尊重し、ユーモアに包んだ上できちんと伝えられるのが一流。聞き手を決して傷つけずに、高圧的に説得したりしない。

私はこの師匠を持っている。10年以上お付き合いさせていただいてる精神科医の安宅勝弘さんと、日本一下手な歌手で商標を得た株式会社上床社長の上床敬子さん（東京・三鷹でレストラン経営）だ。絶え間ない鍛錬もあり、わかりやすい言葉を組み合わせ、聞き手に無理・無駄・ムラなく納得させるのが共通点だ。両名の信頼度は当然高く、多くの人と情報が自然に集まってくる。その結果、ビジネスの幅もどんどん広がっていく。一流になる正攻法と言えるだろう。

「書く」「話す」を再履修する本書の目的の1つでもあるし、アッパー（上級）の人達と付き合えるようになるためのバイブルとして活用して欲しいと思う。

目次

まえがき 3

第1章

なぜ書けないのか 11

減入るメールの偏文章

まずは「生産量増大」に目標を置く

一言の違いで天地の差が生まれる

第2章

自分に関わることから書いてみる 33

書くことを習慣化させるのが上達への早道

例文から課題と解決手法を探っていく

第3章 整理・推敲して形にする 53

書く前から悩まず、書きまくってから上手く悩む

発想、着想、企画、アイデア

物事を考え抜き、創る

陰で笑われるマイナス・キーワード

整理とはまとめること。推敲は練り上げる行為

思想と工法の両面から文章を築き上げる

推敲のポイントを7つに絞る

第4章 新聞雑誌の記事を材料に「わかりやすさ」を研究する 79

1つでも多くの例文に触れる

情報収集のための習慣術

星野仙一さんのコメント力を検証する

第5章

書いたものを口頭で相手へ伝える

101

説得力よりも納得力で深く印象付けていく

もつともらしさを打ち出す7つのポイント

第6章

言い訳とクレームで表現力を考える

117

言い訳は実は重要なコミュニケーション・ツール

マイナス思考を減ぼせ

あらゆる言葉へ敏感に反応しよう

第7章

観察・聴察力の高い人から学ぶ

141

見逃がさない、聞き逃がさないのがトークへも活きる

苦言を呈してくれるアドバイス役を持つ

文章・発言は広報的な情報発信

外で動いて、内向きの生活習慣を正す

第1章

なぜ書けないのか

◆滅入るメールの偏文章

携帯メールを打つ女子学生の姿は一種の時代絵だ。「打ってはコツクリ。返事が来たらムツクリ起きる」光景も珍しくない。会社へ眼を向ければ、隣の席同士で用件をメール交換する若手社員。一見仕事しているように見えて、上司の陰口など社内会話するケースもあるから気色悪い。連絡事項ならまだしも、重要なビジネス文書を軽々しくやり取りするので実に怖い。共にパチパチ状態と思ったら、急に電話で「これはどういう意味だ!」「こんな書き方はねえだろ」「ケンカ売ってんのかよ」と始まる展開が頻発している。

文章を書き慣れていないのに、素人乱用した挙句の悲劇。「言った・言わない」では済まない証拠物件。この現実を強く認識する人は少ないだろう。本書は「どこに問題があるのか」に気付き、加害者とならないためのバイブルである。ファースト・カ

ッター（すぐ切れる単細胞）が増え、トラブル頻出の昨今、その引き金は1つでも減らすに限る。

へんてこメール例

- ①「件名」だけに用件を書いて、中身は真っ白「ニュービーズ」。
- ②「前略」で本文もほとんど略す「全略」族。
- ③「お前さん」「あんた」の銭形平次・常套句じょうとうく
- ④「いつか言おうと思っていた」の長々お説教。
- ⑤ 赤青黄色 幼稚園児のお絵描き教室。
- ⑥ ゆうに3スクロールの「センター試験・長文読解」
- ⑦「実現したい」↓「日幻死体」の大型・変換ミス
- ⑧「返事はいりません」の一方通行・壊れたブーメラン。
- ⑨ 返事が1回も来ないファン・レター型。
- ⑩ メールでしか謝れない道德・再履修オヤジ。

最近こんな体験をした。ある出版社からオファーがあり、打ち合わせを経た後に「先日の内容・条件でよろしければ、出版させていただきたい。そのために正式な企画書と見積もりを送ってほしい」との連絡。早急に送信した一週間後、私はその返信に驚愕した。^{きょうがく}「全体を通して、文章化するのには難しく感じる。見積もりも高すぎる。これに関して、解決策が届かない限り、保留とする」この文章は明らかに切り口上なパターン。高圧的な表現で相手の神経を刺激し、怒らせる典型例だ。分析ポイントは簡単。理由を明記していないのと、不適切な単語を乱用している点だ。「難しく感じる」は「どこが難しく感じるのか、それはどうしてか。こういうものを望んでいる」を鮮明にすべきだし、「高すぎる」↓「ここはこのくらいに抑えたいので再考をお願いしたい」、「解決策」↓「修正・再検討案」へが適切。「届かない限り」とする」は抗議文のそれに他ならず、タブーな文章だろう。

前記をはじめ、「名誉を著しく毀損……」「言いたくはないが」のようなメールは散見するし、これが元でトラブルへ発展する例は後を絶たない。すべては「書くこと」を軽く・甘く見た結果で、それが生む危険性を認識しないと痛い目に遭う。トラブル

も虎（トラ）とブルドックがぶつかっているうちは事故ですむが、トラックとブルドーザーが衝突すれば事件になる。きちんと書けない（美しく書く必要はない）現実は、きちんと表現できないマイナスの前提条件。特に話すの分野でボロが出るのは必至。それこそ、売り言葉に買い言葉でこじれる原因になる。

◆まずは「生産量増大」に目標を置く

私は21年前に新聞社系の出版社へ就職した。入社初日から取材へ出され、帰ってきて原稿作成。研修などなく、すべてがオン・ザ・ジョブ・トレーニング（実地訓練）だった、今でも癪^{しや}なのは無責任で勘違いだらけのデスク2人。ひとりはこちらを見もしないで、原稿を私から左手で受け取り、さーっと読んではそのまま落下させた。そこには大きなゴミ箱があり、拾い上げるわけにもいかない。もうひとりは、きちんと読んでくれたが、「ふーん」と言って付き返す。二人の問題点は書くことの意義と文章の問題点を具体的に指摘しなかったところ。評論だけなら誰でもできる。ただ、この時期に大量の文章を綴ったのが、私にとって後の果実へつながった面は否定でき